

## 百済救援戦争の歴史的位罜

—従軍した三谷郡司の先祖と亡命百済僧弘济を通して—

下向井 龍彦

広島大学大学院教育学研究科

## Historical Position of Baekje(百济) Relief War

-The Served "Ancestor of Mitani(三谷)Gunji (郡司)" and the Exiled Baekje Monk Gusai (弘济)-

Tatsuhiko SHIMOMUKAI

Hiroshima University Graduate School of Education Department of Social Studies  
Education

### Abstract

By focusing on two persons who were involved in AD661-663 Baekje Relief War, the "ancestor of Mitani Gunji " who was a chief of local powerful families in the current northern Hiroshima Prefecture and Gusai who was a monk exiled from Baekje, this paper aims to identify the following three questions:

- 1) What was the Baekje Relief War that the two persons of life are tossed?
- 2) What did the war bring people in the communities?
- 3) What direction did the war bring to the ancient nation of Japan?

## 1. はじめに

三次市向江田から庄原市に向かって東に少し行ったところに寺町廃寺跡がある。1975年に始まった発掘調査によって、塔を東側に、金堂を西側に、講堂を背後に配置する法起寺式伽藍配置の寺院であることが判明した。出土した軒丸瓦は下端が尖った「水切瓦」で、広島県北部、岡山県、島根県に分布する独特の瓦である<sup>1)</sup>。この寺町廃寺こそ、『日本霊異記』(上巻 第7縁)の説話に登場する、百済救援戦争に従軍した「三谷郡大領の先祖」(大領は郡司の長官)が発願し、亡命百済僧弘済が建立した三谷寺である。

さて、近年の「集団的自衛権」をめぐる議論のなかで、百済救援戦争、天智2(663)年のいわゆる「白村江の戦い」が日本最古の集団的自衛権の行使だったのではないかと、この戦争は現代の議論の教訓に出来るのではないかなどの発言が、ネット上や新聞紙上で交わされていた<sup>2)</sup>。百済救援戦争をこのようなかたちで、現代日本が直面する難問についての議論の俎上にのぼせることは、歴史から真剣に学ぼうとする姿勢に乏しかったこの国の言論風土のなかでは注目すべきことであった。しかしその議論を安易な「歴史の教訓」に墮させないために、日本古代史研究者には今日的議論に耐えうる現実の百済救援戦争の実像を提供することが求められる。百済救援戦争が実際にはどのような戦争であり、人々をどのように巻き込み、その後の律令国家体制の整備や外交政策や社会や意識にどのような影響を与えたのか、日本古代史学の立場から明確な歴史像を提示しなければならない。本稿はこのような問題意識に立って用意した

ものである。

長く外交官として日本外交の現場で活躍した元外務事務次官藪中三十二氏は、著書『日本の進路—ヒントは交隣外交の歴史にあり—』<sup>3)</sup>のなかで、古代外交史研究の成果に拠りながら百済救援戦争についても言及されている。私の百済救援戦争に対する認識は、藪中氏が依拠した諸研究とはかなり異なっているが、今日の東アジアの平和問題・安全保障問題を考えるうえで、日本を巻き込んだ古代東アジアの戦争と平和の問題から大いに学ぶ必要があるという点については、立場を同じくするものである。

本稿は、上記のような観点に立って、広島県北部の地方豪族「三谷郡大領の先祖」と亡命百済僧弘済の2人に焦点を当てて、2人の人生を翻弄した百済救援戦争とは何だったのか、この戦争が人々をどのように巻き込んだのか、この戦争が地域社会に生きた人々に何をもたらしたのか、そしてこの戦争が日本の古代国家をどういう方向に導いたのかを描こうとするものである。

なお、本誌は平和学・国際政治学の専門家を読者として想定する専門誌であるから、日本古代史研究独特の用語はできるだけ使わないように努め、史料引用や参考文献も最小限にとどめた。また本文では、日本国内または日本が関わる出来事については和暦・西暦併記、それ以外は西暦で表記した。『日本書紀』『続日本紀』を典拠とする内容については、いちいち出典を明記していない場合が多いこともあらかじめ断っておく。

## 2. 百済の滅亡—動乱の東アジア

### 蘇我政権の親百済路線と大化改新

まず2人を巻き込んだ戦争がなぜ起きたのか、その背景について大化元(645)年6月の大化改新にまで遡って眺めておこう。645年1月に始まった唐の高句麗<sup>こうくり</sup>侵攻を契機に、同年6月、中大兄皇子<sup>なかのおおえのおうじ</sup>らはクーデターによって蘇我入鹿<sup>そがのいるか</sup>独裁政権を打倒した。国内的には豪族連合の旧体制(伴造<sup>とものみやつこ</sup>制・国造<sup>くにのみやつこ</sup>制)を、外交的には親百済路線を維持し続けようとする蘇我政権では、この半島情勢に対応できないとの危機感から蹶起したのであった。直後に樹立された改新政権は、外交政策を大きく転換する。蘇我政権の親百済路線を捨てたのである。

すこし詳しくみていこう。改新时期において朝鮮半島の戦争に巻き込まれる危険性を孕む外交上の最大の懸案は、「任那調」<sup>みまのちよう</sup>問題であった。推古8(600)年以来、日本(この時期の正式国号は「倭国」であり「日本」は未成立であるが、本稿では便宜的に日本と表記する)は新羅との間で、新羅が自国の調に加えて任那調を貢進する限り、かつて日本が宗主権を有していた旧任那を新羅が領有することを承認するという朝貢関係を、取り結んできた。隋帝国、それにつづく唐帝国は、両国のこの関係を黙認していた。ところが642年、百済が新羅に侵攻して旧任那地域を占領すると、百済は自国の調に加えて任那調を日本に貢進し、蘇我政権はそれを受納した。百済から任那調を受納することは、日本が百済の任那地域領有を支持・承認し、新羅の領有権を否定することを意味するものであった。645年の唐の軍事介入に始まる唐・新羅同盟対高句麗・百済同盟の全面対決という構図のなかで、

百済から任那調を受納することは、唐・新羅陣営からみれば、日本が百済・高句麗陣営に荷担することであった。

### 改新政権の外交路線転換

改新政権は、大化元(645)年、百済が貢進した任那調を返却し、翌年、新羅に対して任那調の廃止を通知した。それは任那に対する名目的宗主権の放棄を意味し、ここに任那は名実ともに消滅した。この百済への任那調返却、新羅への任那調廃止通告は、蘇我政権がすすめてきた親百済路線との決別を意味し、同時に半島での戦争に荷担しないことの表明であった。

しかしそれは百済・新羅・高句麗3国との朝貢関係の廃棄を意味しないどころか、その逆であった。半島で激戦を展開する両陣営(百済・高句麗・新羅)は、日本を敵に回さないためには(背後の安全を確保するためには)、日本に対して従属姿勢を示さざるを得ない。こうして645年以後、半島両陣営諸国は毎年日本に朝貢する。この時期の両陣営諸国の対日朝貢は、自国を攻撃しない(敵陣営に付かない)という約束を求めるものであり、日本側の朝貢受納は攻撃しない(相手陣営に付かない)約束である。

改新政権は、海を隔てた「島国」という地政学的優位性を最大限に活かし、圏外に立って半島諸国を(名目的)従属下におくことに成功したのであった。それは両陣営諸国に対する安全保障であり、日本にとっての安全保障でもあった。朝貢関係とは、一種の従属的安全保障(=不可侵)関係のことである。この積極外交を展開するため改新政権は外交窓口の難波<sup>なにわ</sup>に遷都し、外交儀礼の舞台となる壮麗な大極殿<sup>だいごくでん</sup>・朝堂院を建設して半島諸国に対し

て威厳を誇示した。またこの外交を可能にする軍制改革を行った（後述）。

### 改新政権の外交路線の破綻

ところが新羅は改新政権が想定していた以上に対唐従属を強め、それに危機感を抱いた改新政権と新羅との関係は冷却化していった。きっかけは白雉<sup>はくち</sup>2（651）年、新羅使節団が唐制服を着用して来日したことであった。日本側は使節団の追放で応じたが、政府部内では「新羅伐つべし」「罪を問うべし」などの強硬意見が出た。唐制服の着用は新羅の唐への従属強化を象徴するものであり（2年前から新羅は唐服制服化）、以後、日本・新羅関係は急速に険悪化していった（だが新羅は斉明2（656）年までは毎年朝貢）。新羅の対唐従属強化に危機感を強めた中大兄皇子は、白雉4（653）年、王都を難波から飛鳥<sup>あすか</sup>に戻した。

655年、高句麗・百済の侵攻で窮地に立たされた新羅の救援要請を受けて、唐はまたも高句麗侵攻を開始した。唐皇帝は前年（白雉5年）、日本に危急の事態になったら新羅を支援して出兵せよとの勅命を下していた<sup>4</sup>。唐・新羅陣営の側に立って戦えということである。従属国（唐に朝貢する日本は唐の従属国である）への出兵命令は異例のことではない。だが日本はそれを黙殺で応えた。唐皇帝の出兵命令に従わなかったことで、日本側は危機感をいっそう強め、唐の高句麗再侵攻の翌斉明2（656）年には、半島情勢の展開如何では、最悪、唐・新羅連合軍の日本侵攻もありうるとの判断からか、宮都の背後<sup>とうのみね</sup>の多武峰に築城し、必要な石材輸送のために、「狂心<sup>たぶれごころ</sup>の溝」と猛反発を受ける運河建設を強行した。これらの土木事業は、支配層・一般民衆に危

機意識を共有させる演出でもあっただろう。しかし山頂での築城経験のないなかでの築城工事に、石塁は築く端から崩落したという。

一方で斉明3年（657）年、日本は新羅との関係改善を模索して新羅に日本留学僧智達<sup>ちたつ</sup>らの護送を要請したが、唐との同盟関係を背景に新羅はこれを拒否した。援軍派兵しなかった日本への報復措置であり、対日朝貢破棄宣告であった。以後、百済救援戦争を挟む10年間、新羅との国交は断絶する。こうして対岸で戦争する両陣営諸国（百済・高句麗・新羅）の圏外に立って朝貢させるという虫のいいポジショニングは完全に破綻し、唐の脅威がますます強まるなかで、日本は半島情勢への対応力を失い、閉じこもったのである。飛鳥還都・多武峰築城がそれを端的に示している。

### 百済滅亡と日本

このようななか、660年7月、唐・新羅連合軍18万人が海陸から百済領内に電撃的に侵攻し、百済はまたたく間に滅ぼされ、捕虜になった王・王妃・王子らは長安に連行された。百済滅亡の報はすぐに日本に伝わり、国内は上下あげてパニックに陥った。『日本書紀』は「<sup>1</sup>挙<sup>2</sup>国百姓無<sup>3</sup>故持<sup>4</sup>兵、往<sup>5</sup>還於道<sup>6</sup>」と記す。唐は占領地百済に熊津都督府<sup>ゆうしんととくふ</sup>を置き駐留唐軍が軍政を敷いた。これまでは百済が（さらには新羅さえも）、日本にとって、唐の直接的脅威に対する緩衝地帯・防波堤の役割を果たしてきた。だが百済滅亡によって、日本列島は、唐の軍事的脅威にダイレクトに晒されることになったのである。中大兄の政府は、唐から、これまでの緩やかな従属関係＝朝貢関係を越える強固な従属関係＝冊封<sup>さくほう</sup>を要求されること、拒否すれば侵攻を受ける可能性もあることを予感して、震え上がった。

近年の「集団的自衛権」をめぐる議論のなかで、百済救援戦争（白村江<sup>はくすきのえ</sup>の戦い）を日本史上最古の集団的自衛権行使とする意見があるが、百済滅亡の時点で、日本と百済が大化前代のような同盟関係にあったわけではないし、同盟国が攻撃されたから援軍を派遣したわけではないから、「集団的自衛権行使」は当たらない（そうならば百済滅亡以前の百済・新羅戦争や唐・新羅連合軍の百済侵攻のさいに百済側に立って参戦しなければなるまい）。今日的議論の俎上に上らせるためには、歴史事実に即して百済救援戦争について評価しなければならない。

### 3. 百済救援戦争

#### 戦争の決定と戦争目的

百済が唐・新羅連合軍によって攻め滅ぼされるや、百済遺臣鬼室福信<sup>きしつふくしん</sup>らは、ただちに百済再建をめざすレジスタンス運動を開始し、各地で占領軍を撃破した。斉明 6(660)年 10月、福信は、在日中の王子豊璋<sup>ほうしょう</sup>の送還と救援軍派遣を要請する使者を派遣してきた。復興軍の優勢を印象づけるために唐軍捕虜 100 人を献上した。『日本書紀』は中大兄の政府が即座に救援を決定したかのように援軍派遣の詔を載せるが、漢籍の章句の継ぎ接ぎであり<sup>5)</sup>、『日本書紀』編纂者による潤色であろう。実際に動き出すのは 12 月 24 日、斉明天皇以下政府首脳が難波宮に移動して、救援軍派遣を宣言してからである。救援軍派遣決定までの 2 ヶ月近く、政府部内では主戦論、慎重論で激しい議論が交わされたことであろう。主戦論に決したのは、直接的には復興軍優勢への過大評価、遠征唐軍と新羅軍の過小評価が議

論の場を制したからであろう。だが究極的には、4 世紀以来、北からの脅威に対してつねに半島南部の任那・百済に防波堤の役割を果たさせてきた日本の「安全保障」環境が根底から崩壊した現実に対して、百済復興＝対唐防波堤の再構築に賭ける以外に道はない、と判断したからであった。かくして日本は無謀な戦争への道を突き進むことになった。

このように日本政府が鬼室福信の救援要請に応えたのは、百済を復活させて唐の直接的脅威に対する楯にしようとしたからであり、王子豊璋に冠位第一の織冠<sup>しよつかん</sup>を賜与し「勅」によって王位に任命しているのは、復活百済に対して冊封関係的な強固な従属関係を強要するものであった。このような開戦への道を「集団的自衛権行使」とはいわないであろう。石母田正氏はこの戦争を、「双方の側からする帝国主義戦争」と捉えようとした<sup>6)</sup>。

#### 戦時体制の構築と戦争準備

12 月に救援軍派遣を決定した政府は飛鳥から難波に移動し、翌斉明 7 (661) 年 1 月、斉明天皇・皇太子中大兄以下の政府首脳は難波を出航して、3 月 25 日九州博多<sup>な</sup>（那ノ津）に入港、5 月には大宰府南東 15km 付近の朝倉宮に移動した。天皇が極度の心労からか 7 月 24 日に没すると、中大兄は朝倉宮から博多湾岸長津宮に移り、ここをいわば大本営として戦争指導にあたった。

戦争決定後、同年 9 月に先遣部隊 5000 人が王子豊璋を護送して渡海した。この軍勢は唐・新羅両軍の高句麗攻撃を牽制するため、新羅国境方面に展開したようである。翌天智元 (662) 年 5 月に豊璋の百済王即位式を挙行するため、また先遣隊を支援するため増援軍 170 隻 (1 隻 100 人とすれば 17,000 人)



が渡海し、さらに翌天智3年3月には主力部隊27000人が渡海した。主力部隊派遣まで2年半かかっている。緊迫した状況下のこの2年半の歳月をどう捉えるべきか。

百済の滅亡は日本にとっても不意撃ちであり、日本は半島への大軍派遣を想定した準備をまったくしていなかった。このような厳しい状況にもかかわらず、2年半の間に3回にわたって総計約50000人もの大規模動員をなした戦争準備能力に、むしろ驚くべきであろう。その条件はどこにあったのか。

戦争決定に踏み切った直後の斉明6(660)年12月、政府は諸国に「諸軍器」の「備え」と軍船建造を命じ、翌年にはさらに大規模に「修<sub>ニ</sub>繕兵甲<sub>一</sub>、備<sub>ニ</sub>具船舶<sub>一</sub>、儲<sub>ニ</sub>設軍糧<sub>一</sub>」を命じ、レジスタンス勢力に対しても武器・軍需物資の支援をしている。『日本書紀』に具体的な国名をあげているのが「駿河国」への造船指令だけというのは、完成した船が曳航中に伊勢国で転覆したという特記すべき事件があったからである。造船指令が西国だけでなく東国にまで及んでいたことに注目すべきである。

このような短期間の組織的な戦争準備は、それを可能にする動員機構・動員態勢が不可欠である。改新以来、集権的地方行政機構の整備は課題ではあったが、着手されてさえいなかった。改新政権が創設した地方支配機構は「こおりのみやつこ評造」だけであった。それは旧国造・旧地方伴造を評造に任命して、田地調査、人口調査、50戸制の創設とそれを踏まえた統一課税、軍制改革などの諸政策の実行主体としたものである。評造の任務を上から統制する中央派遣常駐行政官は創設されていなかった。したがって諸政策の実態は、中央政府による在地掌握がなされないまま行われた大雑把な

ものであった。

百済救援軍派遣という突然の巨大大事業が、中央集権的行政機構の整備を強行させた。そうりょう こくさい総領—国宰である。国宰はりようせい令制国司の前身であり、ほぼ令制国単位に動員準備を目的に派遣され、総領は数か国を管轄する軍事行政統括官として派遣された。九州全域を担当する筑紫総領、四国担当の伊予総領、中国西部担当の周防総領、中国東部担当の吉備総領が置かれた。国宰は畿内・東国にも置かれたが、総領は西国だけに配備された。私は総領—国宰は、百済救援軍の準備・動員のために斉明7(661)年の初めに置かれたと考えている。

この総領—国宰—評造の中央集権的行政機構を通して、指定数の兵器の製造修理、指定数の船舶の造船修理、指定量の軍糧備蓄、指定数派遣軍軍士の選抜・訓練が集中的に行われ、博多湾まで集結・集積され、三次にわたる渡海作戦が実行されたのであった。わが国における中央集権的地方行政機構が、直接的には百済救援軍動員を契機に整備され始めたことは注意してよい。軍事が集権化を促進する。それは世界史的に普遍化しうることだろう。

### 評造軍と「三谷郡大領の先祖」

救援軍の兵力基盤は主として西国の「ひょうぞう評造軍」であったが、部分的には東海さらには陸奥国にまで及んでいた(表の①⑮)。評造軍は、改新政権が半島諸国との朝貢関係を維持するための軍事基盤として、大化の軍制改革によって創設されたものである。

大化前代のこくぞうぐん国造軍は自己武装能力を持つ国造領内富裕層で構成され、装備は在宅所持、平時の訓練は軍士たちの自己訓練に委ねられ

表 動員された軍士とその出身地

	人 名	出 身 地	管轄総領			出典(『書紀』『統紀』)
①	盧原君臣	駿河国カ	——	評造カ	出陣	天智2 (663) 年8月
②	沙門道久	?	?	軍士	抑留/帰国	天智10 (671) 年11月
③	韓島勝婆娑	豊前国カ	伊予総領カ	軍士	抑留/帰国	〃
④	布師首磐	土佐国カ	伊予総領カ	軍士	抑留/帰国	〃
⑤	猪使連子首	?		軍士	抑留/帰国	天武13 (684) 年12月
⑥	筑紫三宅連得許	筑紫国	筑紫総領	軍士	抑留/帰国	〃
⑦	大伴部博麻	筑紫国上八女郡	筑紫総領	軍士	抑留/帰国	持統4 (690) 年10月
⑧	永連老	?	?	軍士	抑留/帰国	〃
⑨	筑紫君薩夜麻	筑紫国	筑紫総領	軍士	抑留/帰国	〃
⑩	弓削連元宝の子	?	?	軍士	抑留/帰国	〃
⑪	土師連富杼	?	?	軍士	抑留/帰国	〃
⑫	物部薬	伊予国風早郡	伊予総領	軍士	抑留/帰国	持統10 (696) 年4月
⑬	壬生諸石	肥後国皮石郡	筑紫総領	軍士	抑留/帰国	〃
⑭	錦部刀良	讃岐国那賀郡	伊予総領	軍士	抑留/帰国	慶雲4 (707) 年5月
⑮	壬生五百足	陸奥国信太郡	——	軍士	抑留/帰国	〃
⑯	許勢部形見	筑後国山門郡	筑紫総領	軍士	抑留/帰国	〃
⑰	不詳	備後国三谷郡	吉備総領	評造カ	帰国	日本霊異記上7
⑱	越智直ら8人	伊予国越智郡	伊予総領	評造カ	抑留/帰国	日本霊異記上17
⑲	神部直根閉	但馬国朝来郡	吉備総領	評造カ	帰国	粟鹿大明神縁起

⑧~⑪の4人は  
671年帰国

ていた。群集墳の武器副葬状況がそれを物語る。令制備後国三谷郡域(広島県三次市)に所在する常楽寺古墳群 116 基中、副葬品の存在が確認される 2 基から短甲・鉄剣・鉄鎌などが出土している<sup>7)</sup>。武具副葬は被葬者の生前のステイタスを誇示する威信財であり、被葬者が国造軍軍士であったことの証である。国造を指揮官とする彼ら国造軍が大化前代の半島への派兵と軍事作戦の主力だった。百濟救援戦争に従軍した「三谷郡大領の先祖」の祖先は、常楽寺古墳群の被葬者たちからなる国造軍の指揮官として、軍士たちを率いて海を

渡って戦ったかも知れない。

大化の軍制改革は、あらたに創設した「評」内に「兵庫」を建設して、「評」内の旧国造軍軍士が在宅所持してきた個人装備を一括収蔵し、さらに人口調査・50 戸制を踏まえた新規選抜軍士の装備を製作して収蔵し(兵力量の増員)、内部単位 50 人の「評造軍」を創設するというもので(内部編成の画一化)、その改革を実施し指揮官となったのが「評造」であった。「三谷郡大領の先祖」はこのような評造だったのである。個人装備の一括収蔵は、装備の点検・修理と廃棄・製作を効率化

し、円滑な動員を可能にし、訓練の集団化を促す（「兵庫」にはグランドが併設されていた）。評造軍は国造軍に比べてはるかに革新され強化された軍隊だったといえよう。改新政権はこの「評造軍」を半島諸国に朝貢を強要するための軍事基盤としたのである。

## 動員

百済救援戦争の兵力基盤は総領—国宰によって動員された「評造軍」であり、吉備（備後）国三谷「評」の評造だった「大領の先祖」は、国宰から割り当てられた員数を配下の評造軍軍士から選抜して訓練を施した。派遣軍軍士以外の残留軍士、一般住民男女は派遣軍軍士たちの装備の製作・修理、騎馬・駄馬の育成、軍服などの縫製、軍糧の備蓄に立ち働いたであろう。「大領の先祖」は軍士たちを率いて産土神うぶすながみに武運長久と無事生還を祈願し、生還できたら産土神のために伽藍を建立することを誓い、集結期日に間に合うように出陣した。「大領の先祖」や軍士たちの家族・親族、「評」内住民のすべてが無事生還を祈って「評」境まで見送り、『万葉集』さきもり防人歌が描くよりはるかに切実な「別離の悲歎」が繰り広げられたことであろう。『日本霊異記』が描く「備後国の三谷の郡の大領の先祖、百済を救はむが為に軍旅に遣さる。時に誓願を発して言はく『若し、も平たいらかに還り来らば、諸神祇の為に伽藍を造立せむ』といふ。」の一節から、私は以上のような光景を想像する。

強制動員とはいえ、総領—国宰を通じて危機感を煽られ、「大王おおきみの辺にこそ死なめ、顧みはせじ」（大伴家持おおとものやかもち）、「今日よりは顧みなくて大王しこの醜みたての御楯と出で立つ我は」（防人歌）などと歌われるような「皇すめらみくさ軍」観念を、タテマエとしては受け入れていたであろう

うが、実際に従軍する評造軍は指揮官から軍士にいたるまで皆で無事に帰ろうと誓い合っていたのである。

「大領の先祖」率いる三谷「評造軍」は国宰駐在地（国府）に集合し、他の吉備（備後）国内評造軍とともに吉備総領・備後国宰に引率されて博多長津宮の大本営に集結した（備後国が成立していたかどうかは不明）。西日本中心に全国各地から同じように国宰に引率された評造軍が続々と集結する博多湾岸には、軍士たちを収容する小屋やテントが建ち並び、武器・軍糧の梱包が積み上げられ、湾内には軍船がひしめき、近隣諸国から動員された人夫や炊出しの女性たちがせわしく立ち働き、海浜では激しい戦時訓練が行われていたことであろう。

## 白村江の決戦

「大領の先祖」率いる三谷「評造軍」が3回にわたって渡海したどの「軍」に加わっていたかはわからないが、白村江の決戦に従軍したものとして話を進めよう。各地で攻勢を展開していた百済復興軍であったが、指導者鬼室福信が即位間もない百済王豊璋しつしに嫉視されて殺害されるや急速に抗戦能力を低下させ、錦江下流きんこうの要害周留城すに、包囲する唐・新羅連合軍の大軍を相手に籠城していた。救援軍主力が天智2(663)年3月に渡海して5ヶ月、半島南部に展開していた日本軍は、周留城包囲網を打破し一挙に反転攻勢に出ようと全軍集結して、錦江河口白村江に陣取る唐軍軍船集団に決戦を挑んだ。籠城する百済復興軍も日本軍の攻撃に呼応して討って出た。これが史上名高い「白村江の戦い」である。8月27日、28日の両日、日本軍は史上はじめて唐軍と対戦し、瞬時のうちに壊滅的敗北を喫



した。兵船 400 艘が焼き払われ、炎と煙が天を焦がし、血と炎で海は朱に染まった（『旧唐書』）。海に投げ出された何千もの軍士が溺れ死んでいく阿鼻叫喚のなかで、「三谷郡大領の先祖」は味方の残存兵船に救出されたのか、生きのびることが出来た。九死に一生を得た彼は、産土神の御加護に深く感謝した。『日本靈異記』は「（諸神祇に伽藍を立てると誓願したので）遂に災難を免る」とする。戦場に取り残された多くの軍兵は投降し捕虜となった。

兵力量の差、軍船の大きさの差、兵器体系の差など、いくつもの敗因をあげることができようが、注目したいのは『日本書紀』からうかがえる両軍の戦術の差である。バラバラに突進する小型の日本軍兵船（「争先」「乱伍」）を、整然とした鉄壁の陣形で迎え撃ち、囲い込んで殲滅する唐軍巨大兵船（「堅陣」）。それは、統一的な訓練を十分に積んだ均質な編成の唐軍と、統一的な訓練を受けなかった雑多な編成の日本軍の差であり、編成・訓練システムなど平時の軍事組織の質の差の反映であった。日本軍の後進性が徹底的に暴露された戦いであった。

#### 4. 撤退・亡命・復員

—「三谷郡大領の先祖」と百済僧弘済の出会い—

白村江の敗戦まもない 9 月 7 日、周留城は唐軍に降伏した。百済王族・貴族・将軍以下多数の人々が残存日本軍が集結する「豆礼城」（所在地未詳）に逃れ、25 日、撤退する日本軍に従って日本に亡命した。敗軍を救護し収容する博多湾はパニック状態であったろう。そのなかに「三谷郡大領の先祖」もいた。

中大兄皇子らは敗北の衝撃に動揺するなか、大本営長津宮に敗軍の将や亡命百済高官を集め、軍を解散し、飛鳥へと引き上げていった。多数の亡命百済人が中大兄ら政府首脳に従った。

解散を告げられた全国各地の評造軍は、それぞれ国毎に生存者をまとめて帰郷の途についた。弊衣を纏い、疲れた身体を引きずりながら、傷病者を連れての長く辛い旅路であったろう。「三谷郡大領の先祖」は、百済からの撤退の途次か博多に着いてからか、亡命百済僧弘済に出会って心が通い合った。彼は弘済に告げた。「是非、私の故郷『三谷』に来ていただきたい。私は出陣に当たって無事帰還できたら伽藍を立てると産土神に誓願した。産土神のお陰で生還できた。三谷に寺院を建立し、住持になってくれまいか」。弘済は彼の誓願に心打たれ、見知らぬ異境の三谷を終の棲家にする決意をし、彼とともに三谷の地に行き着いたのであった。『日本靈異記』は「遂に災難を免る。即ち禪師を請けて、相共に還り来る」とする。「大領の先祖」が率いた評造軍軍士の全員が生きて故郷の土を踏んだわけではなかろう。明暗相分かれ、戦死・行方不明軍士の家族は泣き崩れ、長く悲嘆に暮れたことであろう。故国を失って悲痛な思いを共にする弘済は、遺族たちに対し、ことのほか懇ろに仏の功德を説いて励ましたにちがいない。『日本靈異記』は、「三谷寺は、其の禪師の造立する所の伽藍なり。道俗観て共に欽敬を為す。」と続ける。

#### 5. 戦後防衛—古代山城網

敗残の軍を半島から撤収させたあと天智政

権を待ち構えていたのは、百済駐留唐軍の軍事圧力のもとでの熊津都督劉仁願との講和であり、対唐恭順外交であった。天智3(664)年5月、劉仁願の使者として来日した郭務悰は、北九州に12月まで滞在した。おそらく日本に、百済滅亡の承認、半島への不介入、唐への恭順を誓約させたものと思われる。日本は翌年唐皇帝の百済制圧を祝賀する泰山封禪の儀に使者を参加させた(『旧唐書』)。

その一方で天智政権は、唐・新羅連合軍による対日侵攻に備えて、天智3(664)年から、西日本に「山城」網による防衛態勢の構築を開始した。唐軍の予想侵攻ルートに沿って、最前線の対馬金田城、大宰府防衛のための水城・大野城・基肄城など、瀬戸内海への入り口長門城から飛鳥防衛の最後の砦高安城にいたるまでの瀬戸内沿岸諸城が、突貫工事で築造された。天智6(667)年の近江大津宮遷都もこの防衛構想の一環である。この山城網には、同一尺度・同一工法が使われており、配置・占地を含め、政府の戦略的見地からの強力な指導によって築造された。この山城群築造事業は日本にとって初めての経験であり、配置・占地・築城技術のすべてにわたって百済亡命將軍たちの全面指導を仰いだ。

築城のための労働力・資材(土砂・石材・木材・ロープ・牛馬など)の徴発、「版築工法」に対応する労働力の軍隊的編成・管理・指揮には、強力な集権的行政機構を必要とする。救援軍動員のさいに創設された総領—国宰—評造の地方行政機構がそのまま築城機構として活用された。「三谷郡大領の先祖」と三谷評内住人は、救援戦争での壮絶な体験の傷も癒えないままに、備後国南部の常城や茨城<sup>いばらき</sup>(いずれも所在地不明)の築城工事に駆り出されたことであろう。天智9(670)年に

作成された我が国初の戸籍「庚午年籍」は、軍事動員と築城事業を通して強化された政府による人民の直接把握の成果とあってよい。大規模な救援軍動員、大がかりな山城網築造を契機に、中央集権的の地方行政機構が創設され、戸籍による人民の直接把握がはじまったことは重要である。

この山城網による防衛態勢は、山城中心に行政領域を編成した百済「五方」制を模倣した徹底した防衛的軍制であり、総領の拠点城と沿岸諸国国宰の支城に近隣評造軍を結合し、唐軍侵攻に直面した場合、評造軍は所属「城」で籠城抗戦する態勢をとっていた。「三谷郡大領の先祖」もそのように命じられ、再度の動員を覚悟していたことであろう。

だが唐軍は侵攻してこなかった。上下あげて必死で築城した山城網はその本来の機能を果たすことはなかった。すると山城網構築は天智政権の妄想による過剰反応だったのだろうか。そうではない。唐は高句麗を滅ぼした翌年の669年、日本侵攻作戦を真剣に企画し、実行に移す準備をすすめていた。唐帝国が、自らの世界戦略、自ら描く世界秩序の構築に楯突いた日本を放置したまま無罪放免するはずはない。制裁・懲罰を加えるのは当然のことであった。

## 6. 新羅統一戦争と対新羅朝貢強要外交の復活

668年、唐と新羅が共同で高句麗を滅ぼすと、半島統一をめざす新羅と半島の領土化をもくろむ唐との対立が表面化し、671年、唐・新羅は全面戦争へと突入した。唐は日本侵攻どころではなくなった。日本は、結果的に新羅が唐と戦端を開いてくれたお蔭で唐の侵

略を受けずにすんだのであった。(これは、日韓関係・日朝関係を考えるとき、心にとめておきたい事実である。)

ここに敗戦の痛手から立ち直っていなかった日本の外交上の地位が浮上する。百済救援戦争における戦勝国新羅は、天智7(668)年9月、10年ぶりに敗戦国日本への朝貢を復活させた。駐留唐軍は天智10(671)年6月に旧百済官人を使者として日本に援軍を要請し、11月には駐留唐軍600人と旧百済軍1400人総勢船47隻2000人の大使節団を派遣してきた。唐は軍事的示威によって日本を味方に引き入れようとしたのである。唐は威嚇、新羅は朝貢、それぞれ手法は違うが、その目的は同じである。すなわちこの戦争に勝利するために日本を味方に付けたい、最低限敵にまわさない、ということであった。日本は唐・新羅戦争のなかで、キャスティングボードを握るといふ、願ってもない有利な外交的ポジションに立ったのである。「島国」の地政学がもたらした「幸運」である。このような有利な状況のもと、しかし白村江の悲惨な敗北の記憶も生々しい天智政権は戦争に介入することはなかった。

天智政権も、天智没後の天武元(672)年の壬申の内乱に勝利して即位した天武天皇の政権も、ともにひそかに新羅の勝利を願って政治的・精神的に支援した(たとえば軍需物資の供与)。その直接の目的は、新羅を楯にして唐帝国の軍事的脅威を回避すること、長期的には、いったん喪失した半島への影響力を回復すること、すなわち新羅との強固な朝貢関係を再構築することであった。半島の政治地図がいかにも変わろうと、古代日本の半島戦略＝外交方針は一貫していた。半島南部を大陸の大国・超大国の脅威から列島を守るための

防波堤にすること、これである。

天智7(668)年以来毎年朝貢するようになった新羅は、天武4(675)年には唐軍捕虜を貢進し、翌年には新羅の内政を天皇に報告する「国政奏請」を行うなど、対日従属姿勢をアピールした。その意図は、唐・新羅戦争のまっただなか、日本が唐に味方して攻め込んできたなら唐との戦争に勝てない、最低限、中立を守らせたい、ということである。唐との戦争に勝利するために不本意ながら演じる従属姿勢であった。弱みに付け込み従属を迫る日本の尊大さに対する新羅の不信と敵意は、龍になって日本の侵略から国土を守護せんとの遺言によって海中に築造された文武王墓が象徴的に語る<sup>9)</sup>。

677年、対唐戦争に勝利し、681年唐皇帝から正式に新羅王に冊立され、唐帝国との関係が正常化すると、新羅にとって対日従属の必要性は低下した。チャンスは天武死後の弔問外交であった。持統元(687)年1月の日本からの告喪使が、新羅側の薄礼により、まる2年たった持統3年1月、告喪しないまま帰国するという異例の事態が起こった。新羅側の薄礼は従属の緩和または解消の意思表示であり、日本側の厚礼要求は被朝貢国の立場の堅持であり、決裂せざるをえなかったのである。同年4月、帰国した日本使の跡を追うように、日本側の反応を確かめるため新羅弔喪使が来日した。持統天皇は新羅の先例違反4ヶ条(①告喪の応答者の位が低い。②弔問使の位が低い。③使船が1隻。④忠誠心に欠ける)を難詰し、調物を返却するという断固たる態度を示した。翌持統4(690)年9月、新羅は遣唐留学僧と唐抑留捕虜大伴部博麻(表のおおともべのはかま)の⑦を送還してきた。それは新羅の対日朝貢廃棄要求の撤回を意味し、日本・新羅関係は

新羅の全面譲歩で修復することになった。統一を達成してまもない新羅は、国内建設・民族和解を先決と判断し、屈辱的な対日譲歩を決断したのであろう。背後に、東アジア国際秩序の安定をめざす唐帝国の強い意向が働いていたと思われる（唐は新羅を牽制する日本の地政学的位置を重視していたはずである）。

こうして以後の日本律令国家の外交原則が確立した。すなわち、新羅統一戦争中に新羅に押しつけた朝貢関係を堅持することである。それは新羅を唐の脅威に対する防波堤とする安全保障体制であった。

天武・持統朝の軍制改革の目標は、強大化した統一新羅に朝貢関係を強制しうる軍事力を建設することであった。朝貢関係を破棄しようとするれば渡海侵攻も辞さないという意味表示である。大宝元（701）年、大宝律令制定＝律令国家の完成とともに、1戸1兵士を徴兵基準とする総兵力約20万人<sup>10</sup>を擁する大規模徴兵制軍隊＝軍団兵士制が完成した。

「評」と「評造」の軍事機能を基準兵力1000人規模の軍団（指揮官は軍穀<sup>ぐんき</sup>）に純化させ、「郡」と「郡司」が「評」の領域と行政機能を受け継いだ<sup>11</sup>。備後国三谷郡では「三谷郡大領の先祖」の子か孫が郡司＝「大領」に任じられたのであった。律令国家の中央集権的人民統制＝公地公民制（編戸制と班田制）は、公民間の格差拡大（階層分解）を抑制して1戸1兵士の徴兵制を維持するための「軍国体制」であった。

## 7. 抑留・帰還・顕彰・記憶

### 抑留と帰還

百濟救援戦争に派兵された約50000人の

軍士のなかで、今日、少しでもその姿が伝わる帰還軍士は、表に示したとおり伝承を含めて30人に満たない。白村江敗北後、唐軍・新羅軍の捕虜になった軍士たちは、どのような運命をたどったのだろうか。

新羅軍の捕虜となった軍士たちは、比較的早く復員できただろう。668年以降、新羅と唐との関係が険悪化し、新羅は671年ついに唐と戦端を開いたが、この戦争を勝ち抜くには、日本が唐に味方して参戦することだけは阻止しなければならない。新羅は日本側の意を迎えるために日本軍捕虜を解放・送還したのであろう。

一方、唐に連行され捕虜収容所に收容された軍士のなかには、脱走に成功して奇跡的に帰国できたものもいた。『日本霊異記』（上巻 第17縁）の伊予国越智郡「大領の先祖越智直<sup>おちのあた</sup>」（直は名前ではなくカバネ）ら仲間8人が観音信仰のお蔭で脱走帰国できたという説話である（表の⑩、以下同じ）。唐軍の捕虜になり唐土に連行され同じ収容所に入れられていた「越智直」ら8人は、偶然観音像を手に入れ、観音像の御加護で絶対に帰還できるとの信念に支えられて、ひそかに松の木を切り倒し割り抜いて丸木舟を作った。船に観音像を安置して一心に念じて漕ぎ出すと、船は西風に乗って無事に筑紫に着岸した。帰還への執念を支えたのは観音像への帰依であった。「越智直」は帰国後、その労を賞されて「越智郡の大領」に任じられ、この観音像を本尊とする寺院を建立して崇敬した、という。

帰還兵たちのなかに、壮絶な体験の癒やしを仏教に求める者が多かったことを、「越智郡大領の先祖」の説話と「三谷郡大領の先祖」の説話は物語っている。7世紀後半の地域社会への仏教の浸透には、帰還兵たちの戦争体



験・捕虜体験、また父や兄弟を失った遺族の悲しみが大きく影響していたのである。

在唐捕虜の中には国家奴隸（「官戸」）として、貨幣鑄造労働・軍糧運搬などに酷使され、40余年を経てようやく慶雲元（704）年7月、遣唐使粟田真人<sup>あわたのまひと</sup>の帰国とともに帰還できた3人がいた（表の⑭⑮⑯）。同4年5月、文武天皇から「勤苦」を「憐」れんで3人に与えられたお見舞いは、「衣一<sup>きぬひと</sup> 糶<sup>かさね</sup>および塩穀」だけであった。これが40余年の奴隸生活の代償だった。それでも彼らは奇跡的に生還できた。国家奴隸とされた軍士たちの多くは酷使された挙げ句に、あるいは解放されて異境の人々に混じって暮らしたすえに、残した家族や故郷の山河への思いを胸に彼の地で果てたのである。

## 顕彰と「愛国」

天智8（669）年、唐が日本侵攻計画をすすめていることを知った筑後国出身の大神部博麻ら5人（⑦～⑪）は、この情報を故国日本に通報しようとしたが旅費がない。そこで博麻は戦友4人に、自分を奴隸として売って旅費に充てて通報するよう提案し、4人は博麻を売って故国へと旅立つ。『日本書紀』は「得<sup>レ</sup>通<sup>二</sup>天朝<sup>一</sup>」とし（持統4（690）年10月22日条）、通報に成功したように書いてあるが、果たしてそうか。唐・新羅戦争開始後の天智10（671）年11月、前記した新羅駐留唐軍使節団2000人による対日示威外交において道案内を勤めたのが、4人のうちの1人、筑紫君薩夜麻<sup>つくしのきみさちやま</sup>（表の⑨）であった。通報をめざした4人は唐軍に拘束され、通訳として利用され、解放されたのであろう。薩夜麻らの帰国から遅れること20年、持統4（690）年、博麻が帰国した。派兵されてから30年近い

歳月が流れていた。持統天皇は「詔」を下し「朝<sup>みかど</sup>を尊び国を愛し」（「尊<sup>レ</sup>朝愛<sup>レ</sup>国」）、「己<sup>おのれ</sup>を売<sup>レ</sup>り忠を顕<sup>レ</sup>した」（「売<sup>レ</sup>己<sup>レ</sup>顕<sup>レ</sup>忠」）精神を高く顕彰し、「務<sup>む</sup>大<sup>だい</sup>肆<sup>し</sup>」（従7位下に相当する淨御原令<sup>きよみはらりょう</sup>の冠位）と「繩<sup>あしぎぬ</sup>5匹、綿<sup>わた</sup>10屯、布30端、稻1000束、水田4町」を賜与してその勲功に報いた（さらに水田の曾孫までの保有と「三族」の課役免除の特典も与えられた）。我が身を売って救国しようとした「愛国」心をとくに顕彰しての賜与であるが、この程度であった。しかしより重要な点は、彼の「愛国」美談が「詔」によって国宰を通じて全国の公民に布達されたことである。博麻の救国の思いと30年間の抑留の苦難は、持統朝政府によって、公民全体の「愛国」心（古代ナショナリズム）高揚のための宣伝材料として利用されたのである。

## 記憶と戦争忌避

ところで8世紀末～9世紀初頭に成立した『日本霊異記』に、信心の靈験あって帰還できた百濟救援戦争従軍軍士（評造軍指揮官）の説話が2つも収められているのは、なぜだろうか。民衆に因果応報を説く話は、彼らの感性を揺さぶる現実感がなければならない。白村江敗戦の悲劇的体験、帰還者と未帰還者を分けた運命の明暗は、100年以上経ってなお、世代を超えて人々の間で語り継がれ、これらの説法が、人々の歴史的記憶を因果応報の具体的例証として呼び覚ますのである。8世紀の人々（とりわけ西日本の人々）にとって、記憶のなかにある戦争とは白村江の敗戦であり、父祖から聞いた悲劇であった。

8世紀の民衆の戦争観を直接語るものはない。しかし類推することは不可能ではない。8世紀の戦争の危機における民衆の態度に間



接的ながら焦点を当ててみよう。

天平 4 (731) 年 8 月、藤原四卿政権は、<sup>ぼっかい</sup>渤海との軍事同盟にもとづき渤海の対唐戦争を支援するため、新羅の対唐支援出兵を牽制しようと諸道節度使を配置して軍拡政策（軍団数・兵士数増員）と日本海側諸国での対新羅武装警戒＝大規模軍事演習を開始したが、この準戦時体制はその 1 年前に配置された畿内惣管・諸道鎮撫使による、①集会の禁止、②私的隷属関係の禁止、③政治批判の禁止、④盗賊の禁止、⑤流言蜚語の禁止、⑥武器携帯の禁止、⑦国郡司の監督強化を内容とする戒厳令を前提に実施されたのであった。この軍拡政策終了後の天平 11 (739) 年に、四卿全員をも死に迫いやった天然痘被害対策の一環として橘諸兄政権によって兵士制が全廃された（ただし奥羽・大宰府管内諸国は除外）。渤海支援軍拡政策に不信感を募らせた新羅は、侵攻作戦を可能にする軍備を一時全廃した日本に対し朝貢破棄を通告してきた。日本律令国家の対新羅朝貢強要外交は破綻に瀕したのである。

その後、独裁権力を手にした藤原仲麻呂は、天平 18 (746) 年、兵士制全面復活＝侵攻作戦可能な再軍備を実現したが、この兵士制復活は 1 年前に任命した諸道鎮撫使の戒厳令によって実施されたものであった。再軍備を背景に、ふたたび渤海との軍事同盟にもとづき、仲麻呂は天平宝字 4 (760) 年、諸道節度使を配置して本格的に新羅征討準備を始めるが、その 1 年前にも諸道巡察使による民情把握が実施されていた（鎮撫使に準じるものである）。

これらの事実は、私に、8 世紀律令国家の軍拡政策や戦争準備態勢に対する民衆の反応を読み取るよう促す。すなわち軍拡・戦争に

対する消極的姿勢である。そのような民衆の消極的・非協力的な姿勢を封じ込めることなしに、対外的軍事行動を実行に移すことは不可能である。諸道鎮撫使はそのような民衆の動きを抑圧し、民衆の意識を戦争へと駆り立てるための戒厳司令官だったのである。

8 世紀の民衆は、「愛国」者の顕彰や軍団での兵士に対する精神教育などさまざまな教化政策によって、タテマエでは「霰降る 鹿島<sup>すめらみくさ</sup>の神に 祈りつつ 皇<sup>すめらみくさ</sup>軍に 我は来にしを」、「今日よりは 顧みなくて 大王の醜の御楯と 出で立つ我は」（『万葉集』防人歌）などに示される「皇軍」意識を植え付けられていた。しかしホンネは戦争を忌避していたのである。その根底には世代を超えて記憶された白村江の敗戦体験があった。仲麻呂の新羅侵攻計画が途中で挫折を余儀なくされた背景には、地域社会の民衆たちの戦争忌避の態度もあったのではなかろうか<sup>12)</sup>。

## 8. 対新羅外交の解消と律令国家の転換

新羅に朝貢を強要するための大規模徴兵制軍隊と、それを支える公地公民制(班田制・編戸制)は、新羅との朝貢関係に固執する限り、維持し続けなければならない「軍国体制」であった。しかし安祿山の乱後の唐帝国の弱体化によって東アジアの国際秩序(冊封体制)は弛緩していく。唐の脅威の低下は新羅への朝貢強要の必要性、したがって大規模徴兵制軍隊の必要性を低下させる。「軍国体制」を永続的に維持することは、政府にとっても地域社会にとっても、重荷である。ところが「島国」であることの「幸運」は、崩壊する国際秩序の圏外に離脱することを可能にした。

宝亀 11(780)年 2 月、新羅朝貢使の帰国に

当たって、日本政府は事実上の朝貢関係解消を通告し、1ヶ月後の3月、軍団兵士制の大幅削減(大軍縮)を敢行し、延暦11(792)年、軍団兵士制を廃止した(ただし奥羽・大宰府管内は存続)。大規模徴兵制軍隊=軍団兵士制と対新羅朝貢強要外交が一体のものであったことがわかる。4世紀以来の対半島外交が終焉したのである。すると徴兵制維持のための公地公民制(編戸制・班田制)も不要になる。8世紀末以降、中央集権的統制の緩和政策がすすめられ、地方支配を担当する国司官長(守)の裁量権が拡大し、地方社会では編戸制・班田制による格差拡大抑制機能が低下して格差拡大=階層分解が急速に進行し、富豪層が成長してくる。日本の律令国家体制と地域社会は大きく転換をはじめ(13)。

## 9. おわりに

—亡命僧弘済の地域社会への貢献—

最後にまた亡命百済僧弘済に話題を戻そう。三谷評に落ち着いた僧弘済は、本尊造立のため飛鳥京に行って金や丹(赤色顔料)を購入し、難波から船で備前を経て備中の海浜に上陸して三谷に帰郷した。『日本霊異記』は、その間、難波で亀を買って放生したところ、備前で、海賊に変身した船頭に海に突き落とされたが、亀が助けて備中の浜辺まで背中に乗せてくれて無事帰郷できた、という因果応報譚になっている。

弘済が建立した三谷寺=寺町廃寺は、発掘調査によって基壇の装飾に磚(レンガ)が使われ、創建時には素弁軒丸瓦が使われていたことがわかっており、同時期の百済寺院に類似しているという。寺町廃寺のものと同範の瓦は、その北北西方向に1.5 kmの地点にある大当瓦窯跡でも出土し、三谷寺に使われた

大量の瓦が大当瓦窯など近傍の瓦窯で焼成されたものであることが明らかにされている。注目すべきは、同範の素弁軒丸瓦が備中国賀陽郡の栢寺廃寺跡からも出土し、しかも栢寺の範が寺町廃寺の範に転用されていることである。備中栢寺を建立した技術者集団が三谷寺建立にも関わり、彼らは百済系技術者集団だったと推定される。弘済が飛鳥京で購入したのが金や丹であったことは、本尊本体を製作したのが地元技術者集団であったことを暗示している。また帰郷のさい上陸したのは「備中」の海浜であった。弘済と備中栢寺との繋がりを想起させる。寺町廃寺をはじめ備中・備後地域の古代寺院跡には独特の水切瓦が分布している。この地域に百済系寺院建立技術を移植し、水切瓦を案出したのは、弘済らこの地域の寺院の住持となった亡命百済僧ではなかったか。弘済は単独ではなく、造寺・造瓦・造仏の技術者たちとともに亡命してきたのかもしれない。

弘済は三谷寺を舞台に仏の教えを説いた。その大きなテーマは、彼が故国を失い異境で説法している現実や戦争で目撃したさまざまな悲劇と人間の運命、それに殺生忌避=避戦ではなかったか。それは戦争の時代に翻弄されてきた人々の心に深く響いたことであろう。この時代とそれに続く8世紀を生きた人々には戦争を嫌悪し忌避する精神が宿っていたのではないか。弘済が備北地域の人々の意識形成に与えた影響は大きかったといえるだろう。

弘済らはまた、仏教技術を生活技術へと転用して(たとえば道橋・灌漑・建築)、地域社会の生活向上に寄与したことであろう。弘済は、このようなかたちで備北地域の地域文化の形成に大きく貢献したのであった。発掘

調査によれば、軒丸瓦の最後の様式は 8 世紀末から 9 世紀初頭に採用された単弁蓮華文である。『日本霊異記』が成立したころ、三谷寺はまだ存続していた。開基の弘済の事績も 1 世紀以上を経てなお記憶されていたのだろう。

以上、本稿では百済救援戦争とそれに巻き込まれた日本・百済両国の 2 人の人物を糸口に、7 世紀前半～8 世紀末の東アジア国際関係のなかで、戦争と軍隊と国家体制と民衆の関わり方について粗雑な議論を重ねてきた。本稿で論じたことが多少でも、現代の戦争と平和の問題を考えるヒントを提供していたなら、これにすぎる喜びはない。

本稿では、百済救援戦争の戦場となった朝鮮半島の人々の戦争体験にはまったく触れていない。何倍もの悲惨な体験をしたことはいうまでもない。

## 註

- 1) 『平成 10 年度考古企画展 ひろしまの古代寺院 寺町廃寺と水切り瓦』（広島県立歴史民俗資料館 1998）。この図録には、寺町廃寺跡の調査研究に先鞭をつけられた松下正司氏をはじめその後の調査研究の成果が凝縮されている。本稿の寺町廃寺についての記述は、すべてこの図録による。
- 2) たとえば『朝日新聞』2014 年 6 月 2 日版「温故知新 白村江の戦い 『最古の（集団的自衛権 下向井補）行使例』ネットで話題」の見出し記事。
- 3) 岩波書店 2015。
- 4) 『新唐書』日本伝、『善隣国宝記』孝徳天皇白雉 5 年条所引「唐録」。なお石母田正『日本の古代国家』（岩波書店 1971）第 1 章第 3 節。私の東アジア国際関係認識は、石母田氏が本書で提起した国際的契機論から多くを学んでいるが、個々の事象や論点の理解についてはかなり異なっている（たとえば大化の軍制改革）。
- 5) 岩波日本古典文学大系『日本書紀』斉明 6(660) 年冬 10 月条の校訂者頭注。
- 6) 石母田正「古代における『帝国主義』について」（『歴史評論』256 1972）
- 7) 植田千佳穂「史跡浄楽寺・セツ塚古墳群測量調査報告」（『広島県立歴史民俗資料館 研究紀要』4 2003）
- 8) 『続日本紀』養老 3(719)年 12 月 15 日条に「停<sub>二</sub>備後国安那郡茨城、芦田郡常城<sub>一</sub>」とある。
- 9) 『三国遺事』（巻 2 万波息笛）所引「感恩寺寺中記」に「文武王欲<sub>レ</sub>鎮<sub>二</sub>倭兵<sub>一</sub>、故始<sub>二</sub>創此寺<sub>一</sub>」とある。
- 10) 『律書残篇』（『改定史籍集覧』第 27 冊所収）は 8 世紀前半の全国総郷数を 4012 郷とする。50 戸 1 郷で単純計算すると全国総戸数 20 万 600 戸となる。
- 11) 拙稿「日本律令軍制の形成過程」（『史学雑誌』100-6 1991）
- 12) 拙稿「律令軍制と民衆」（『歴史評論』511 1992）、同「軍縮と軍拡の奈良時代」（『歴史博』71 1995）、同『山口県史 通史編 原始・古代』（山口県 2008）第 7 編第 4 章「軍団と兵士」など。渤海との軍事同盟により新羅挾撃を狙ったのは、安祿山の乱で唐が新羅を支援できないと判断したからであった。なお、『続日本紀』記事が語る表面上の戦争中止＝節度使停止理由は「早魃」であるが、実際には対唐交渉で成果を得た渤海が挾撃作戦中止を通告してきたからであろう。しかしいったん走り始めた戦争への道に、自身の孤立と没落をおそらく予見したうえでブレーキを掛けた仲麻呂の決断は、英断というべ

きかもしれない。

13) 拙稿「光仁・桓武朝の軍縮改革について」(『古代文化』49-11 1997)。なお一般向けに書いた拙著『武士の成長と院政』(講談社日本の歴史 07 巻 2001) 第 1 章第 1 節「律令国家の変質」の前半部分で、日本列島と朝鮮半島の地政学を踏まえた、4 世紀～8 世紀末の日本と朝鮮半島南部諸国との安全保障関係について概観した。

(付記) 本稿は、寺町廃寺と『日本靈異記』に関する記述以外は、主として拙稿(1991、1995、1997) および下向井が担当する広島大学「平和科目」講義『戦争と平和に関する史的研究 日本古代の国家と軍制』第 8 講「大化改新と軍制改革」、(第 9 講「百済救援戦争」、第 10 講「戦後防衛と新羅の朝貢再開」、第 13 講～第 14 講「律令軍制の展開過程」) をもとにしている。

本稿と『芸備地方史研究』300 号特集号(2016 発行予定)に寄稿した論文「三谷郡司の先祖と百済僧弘濟—古代の戦争を生き延びた人々の苦難と亡命僧の地域社会への貢献—」(以下、芸史論文)との関係について触れておきたい。本稿は、芸史論文の「1. はじめに」と「7. 抑留・帰還・顕彰・記憶」を大幅に加筆し、「2. 百済の滅亡—動乱の東アジア」「8. 対新羅外交の解消と律令国家の転換」をあらたに追加したものであり、他の 3. ～6. の部分は多少の字句の修正・加筆を施してはいるものの、芸史論文の内容とほぼ同一である。本誌の読者が『芸備地方史研究』誌に触れることはほとんどないはずなので、歴史研究の成果を平和論に接続させる意図を込めて、本誌に寄稿させていただく。芸備地方史研究会および広島大学平和科学センターにはこの点につき、ご了解いただきたい。